

高崎市文化財調査報告書第393集

下中居天神裏遺跡 3

— 建売分譲に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

2017

高崎市教育委員会
有限会社毛野考古学研究所



調査区全景（空撮、北から）



調査区全景（南東から）



SP04出土遺物

例 言

1. 本書は、建売分譲に伴う下中居天神裏遺跡3（市遺跡番号 687）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 「下中居天神裏遺跡3」は、群馬県高崎市下中居町字天神裏 483 番 1 外 2 筆に所在する。
3. 発掘及び整理調査の期間・発掘調査の面積は次のとおりである。
【発掘調査期間】 平成 28 年 10 月 19 日～平成 28 年 11 月 2 日
【整理調査期間】 平成 28 年 11 月 3 日～平成 29 年 6 月 30 日
【発掘調査面積】 130㎡
4. 発掘及び整理調査は、開発事業者である吉井正利氏・高崎市教育委員会・有限会社毛野考古学研究所による三者協定を締結し、高崎市教育委員会の指導のもと、委託を受けた有限会社毛野考古学研究所が実施した。
5. 発掘及び整理調査に関わる経費は吉井正利氏の負担による。
6. 発掘及び整理調査は、常深尚(有限会社毛野考古学研究所)が担当した。
7. 本書の編集・執筆については、矢島浩(高崎市教育委員会文化財保護課)・常深が協議して行い、第 1 章を矢島、第 2～6 章を常深が執筆した。
8. 遺構及び遺物の写真は常深が撮影し、空中写真は小出拓磨(有限会社毛野考古学研究所)が撮影した。
9. 調査資料は、一括して高崎市教育委員会で保管している。
10. 発掘及び整理調査の参加者は、以下のとおりである。
(発掘調査) 石倉稔夫 碓井俊夫 岡庭秋男 亀田浩子 橋元裕児
(整理作業) 武士久美子 土井道昭 西井照美 半澤利江 山田美智子 吉村光恵 渡辺博子
11. 発掘調査の実施から報告書の刊行に至る過程で下記の機関にご協力賜わった。記して感謝申し上げる次第である(敬称略、順不同)。
(株)三幸 カネコハウス(有) (有)明総

凡 例

1. 挿図中に使用した方位は、国家座標 (IX系) の北を表す。座標軸は世界測地系である。
2. 本書ではテフラの呼称として次の記号を用いた。
As-A : 1783 (天明三) 年噴出の浅間 A テフラ、As-B : 1108 (天仁元) 年噴出の浅間 B テフラ
As-C : 3 世紀終末から 4 世紀初頭噴出の浅間 C テフラ、Hr-FA : 6 世紀初頭噴出の榛名ニッ岳渋川テフラ
3. 遺構の表記は以下の記号を用いた。
SB : 掘立柱建物跡 SD : 溝 SE : 井戸 SK : 土坑 SP : ピット SX : 窪地
4. 遺構及び遺物実測図の縮尺は次のとおりである。
【遺構】 全体図…1/200 掘立柱建物跡・井戸・土坑…1/60 溝…1/40・1/60・1/80・1/150
ピット…1/40 SX…1/80
【遺物】 土器・瓦・石製品…1/3・1/4 金属製品・石器…1/2
5. 遺物番号は、実測図・観察表・写真図版ともに共通である。
6. 本文・土層断面図・土層注記中のローマ数字は基本土層、算用数字は遺構内堆積土の層番号を表す。
7. 土層及び遺物の色調は『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄著 (財)日本色彩研究所)を使用した。

目次

巻頭図版・例言・凡例・目次		第5章 遺構と遺物	6
第1章 調査に至る経緯	1	第1節 調査の概要	6
第2章 遺跡の立地と歴史的環境	2	第2節 掘立柱建物跡	7
第1節 地理的環境	2	第3節 溝	7
第2節 歴史的環境	2	第4節 井戸	12
第3章 調査の方法と経過	5	第5節 土坑・ピット	13
第1節 調査の方法	5	第6節 その他	16
第2節 調査の経過	5	第6章 調査成果	17
第4章 基本層序	5	抄録・写真図版・奥付	

挿図目次

第1図 調査区域図	1	第9図 溝SD03・05出土遺物	10
第2図 下中居天神裏遺跡位置図	2	第10図 溝SD04平面図・断面図及び出土遺物	11
第3図 下中居天神裏遺跡周辺の遺跡分布	3	第11図 溝SD06平面図・断面図	12
第4図 基本層序	5	第12図 井戸SE01平面図・断面図及び出土遺物	12
第5図 下中居天神裏遺跡3全体図	6	第13図 土坑及びピット平面図・断面図	14
第6図 掘立柱建物跡SB01平面図・断面図	7	第14図 土坑及びピット出土遺物	15
第7図 溝SD01平面図・断面図及び出土遺物	8	第15図 SX01・02平面図・断面図	16
第8図 溝SD02・03・05平面図・断面図	9	第16図 遺構外出土遺物	16

表目次

第1表 周辺の遺跡一覧表	4	第5表 井戸SE01出土遺物観察表	13
第2表 溝SD01出土遺物観察表	9	第6表 土坑・ピット一覧表	13
第3表 溝SD03・05出土遺物観察表	10	第7表 土坑及びピット出土遺物観察表	15
第4表 溝SD04出土遺物観察表	11	第8表 遺構外出土遺物観察表	16

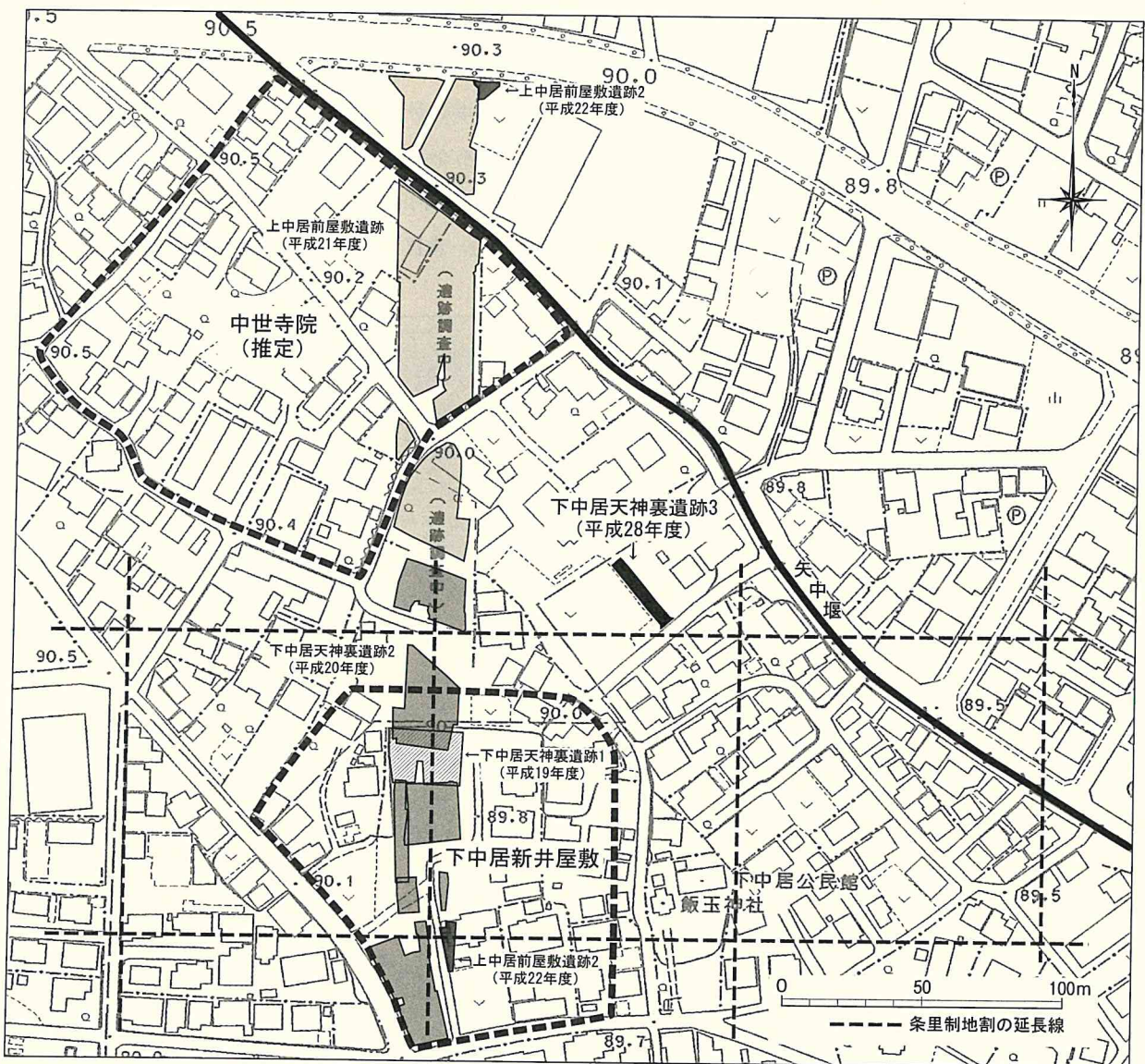
写真図版目次

巻頭図版1	溝SD02全景(南西から)
調査区全景(空撮、北から)	溝SD05全景(東から)
調査区全景(南東から)	溝SD06南東端土層断面(北西から)
巻頭図版2	溝SD06全景(南東から)
SP04出土遺物	P L . 4
P L . 1	井戸SE01全景(北から)
調査区全景(空撮、北西から)	土坑SK10全景(北西から)
調査区全景(空撮、南から)	土坑SK11・12全景(東から)
調査区全景(空撮、左上が北)	土坑SK16全景(北西から)
P L . 2	ピットSP04上層遺物出土状況(南東から)
調査区全景(北西から)	ピットSP04下層遺物出土状況(南東から)
溝SD01北部全景(南東から)	SX01全景及び土層断面(北西から)
P L . 3	SX02全景及び土層断面(北西から)
溝SD01北端土層断面(南東から)	P L . 5
溝SD01中央部土層断面(北西から)	出土遺物①
溝SD03全景(西から)	P L . 6
溝SD04全景及び土層断面(北西から)	出土遺物②

第1章 調査に至る経緯

平成28年8月、土地所有者吉井正利氏と群馬グランディハウス株式会社から、高崎市下中居町字天神裏において計画している建売分譲に伴う宅地造成工事に先立つ埋蔵文化財の照会が市教育委員会文化財保護課（以下、市教委と略）にあった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である中居32遺跡群内に所在するため、工事に際しては協議が必要である旨を回答した。同年8月7日には、市教委へ埋蔵文化財試掘（確認）調査依頼書が、同年8月10日に文化財保護法に基づく届出が提出された。同年9月7日に試掘（確認）調査を実施した。その結果、中世の溝を確認した。この結果をもとに開発者と市教委で協議したが、現状保存は困難との結論に達し、発掘調査による記録保存の措置を講ずることで合意した。なお遺跡名については「下中居天神裏遺跡3」とした。

発掘調査は「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要項」に順じ、平成28年10月13日に土地所有者吉井正利氏と民間調査機関有限会社毛野考古学研究所との間で契約を締結、また同日に土地所有者吉井正利氏・有限会社毛野考古学研究所・市教委での三者協定も締結し、調査の実施にあたって市教委が指導・監督をすることとなった。



第1図 調査区域図（高崎市発行『高崎市都市計画基本図』1/2,500）
 ※中世寺院・下中居新井屋敷の推定範囲は高崎市教委2015「上中居前屋敷遺跡2」による

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 地理的環境

下中居天神裏遺跡は関東平野北西端部の高崎台地上に立地し、標高は90.0mである。高崎台地は、約2.2万年前の浅間山噴火に伴う前橋泥流堆積物を基盤とする前橋台地の西方、井野川と烏川に挟まれた地域を指し、前橋泥流堆積物の上位には約1万年前に堆積した高崎泥流が堆積している。台地上は小河川が網目状に流れ、低湿地が入り組んだ地形となる。本遺跡は北西から南東へと延びる微高地上にあり、矢中堰の南側に隣接する。

第2節 歴史的環境

縄文時代には上中居遺跡群(5)で中期後半の集石や前期～後期の土器、土偶・石棒が出土している。倉賀野万福寺遺跡(94・95)や中居町一丁目遺跡3(14)で竪穴住居跡が検出されている。

弥生時代は中期後半になって竜見町遺跡・城南小学校校庭遺跡・高崎競馬場遺跡(39)で土器が出土し、高関堰村遺跡(46)で中期末の環濠の溝が確認された。後期には井野川流域に集落・墓域が活発に展開していく。

古墳時代には、4世紀末頃から烏川左岸に倉賀野古墳群と佐野古墳群が形成される。倉賀野古墳群では、浅間山古墳(135)・大鶴巻古墳(137)に続き、5世紀後半の小鶴巻古墳(138)が築造される。佐野古墳群では長者屋敷天王山古墳(134)に始まり、6世紀後半～7世紀初頭の蔵王塚古墳(133)・漆山古墳(132)まで継続する。烏川左岸の集落は、舟橋遺跡(83)・下佐野遺跡(84・85)・上佐野舟橋遺跡(86～89)・倉賀野万福寺遺跡(94・95)があり、本遺跡周

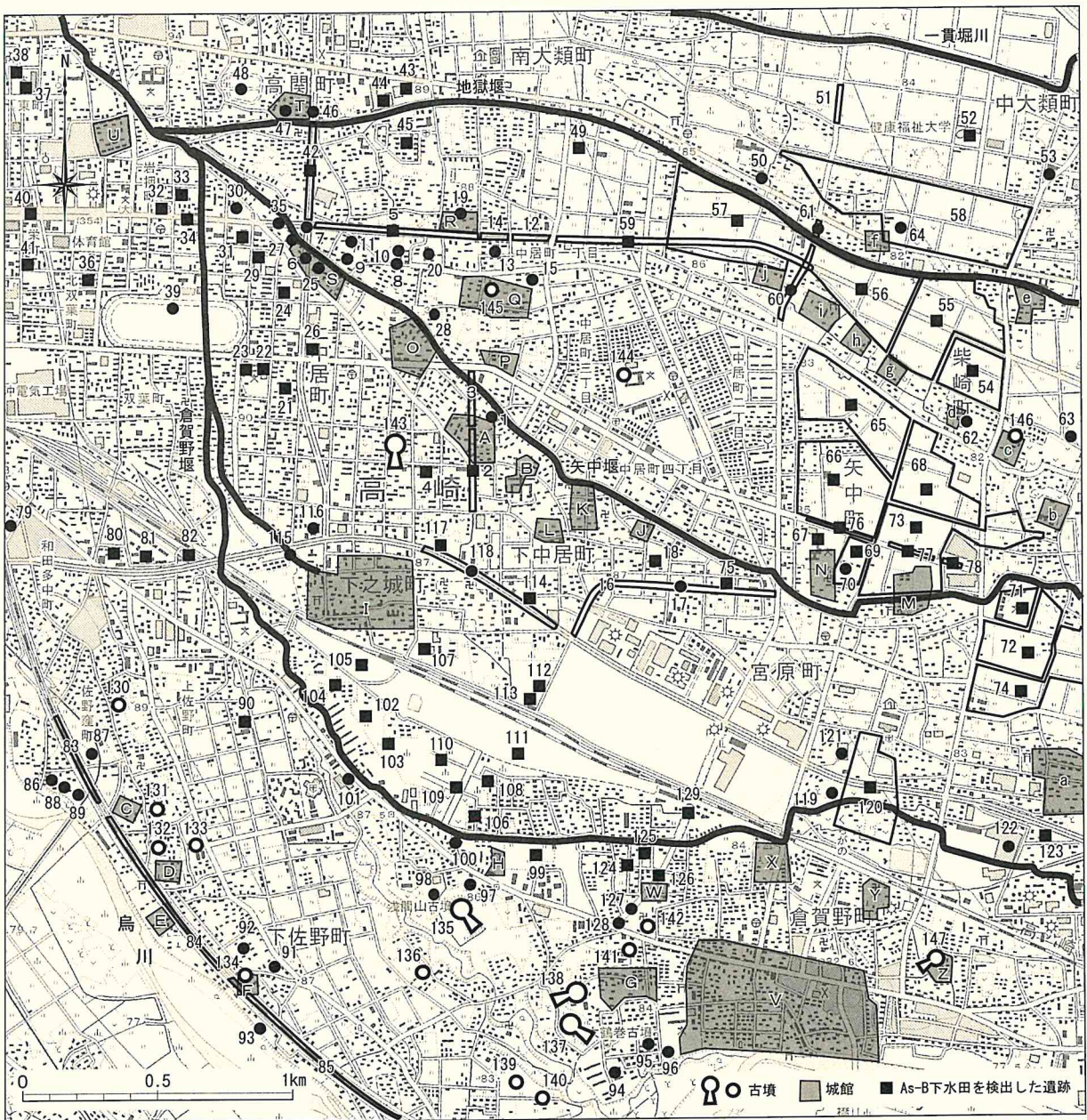


第2図 下中居天神裏遺跡位置図(国土地理院発行『宇都宮』・『長野』1/200,000を50%縮小)

辺でも中居町一丁目遺跡(12)・上中居遺跡群(5)において前期の集落と周溝墓が確認された。7世紀の上中居岡西2遺跡(20)や上中居字名室遺跡(28)では、前代と異なって東西南北を指向した大溝が掘削され、土地利用の変化が指摘されている。

平安時代にはAs-B下の水田が多くの遺跡で確認されている。下之城条里遺跡(118)では、1町間隔の水路を伴う大畦畔を構築し、条里制地割に基づいた水田経営が知られる。条里制地割は下之城村前遺跡(106~111)・下之城仲沖遺跡(102~105)でも確認され、さらに下層の水田からも同一方向の溝が検出され、B水田以前からの条里制地割の存在が示された。奈良平安時代の集落は中居町一丁目遺跡(12)・上中居辻薬師遺跡(8)などがある。

中世には、矢中堰沿いに和田氏配下の武士団が居を構え、本遺跡南西側には下中居新井屋敷(A)が想定され、下中居天神裏遺跡(2)において屋敷に関連する堀が確認されている。また新井屋敷の北に隣接する上中居前屋敷遺跡(3)では、15世紀頃の瓦を出土する溝・井戸、礎石を有する柱穴が検出され、中世寺院が想定されている。



第3図 下中居天神裏遺跡周辺の遺跡分布 (国土地理院発行『下室田』・『前橋』・『高崎』・『富岡』1/25,000)

第3章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

表土掘削は重機を使用し、黒色土（VI層）上面まで掘削した。遺構検出はVI層上面で行い、溝・井戸・土坑・ピットを確認した。遺構の測量は、断面図を手実測（縮尺1/20）、平面図を電子平板で行った。平面図中の等高線は10cm間隔とした。遺構の写真撮影は、35mmモノクロ・カラーリバーサルフィルムカメラとデジタルカメラを併用した。遺跡全景の空中写真はドローン（DJI社 Phantom 2 Vision+）を使用して撮影した。

遺物注記は手書きにて行い、「687 SD01 No.1」のように注記した。遺物の写真撮影はデジタルカメラ（Nikon D5500）を使用した（JPEG、RAW）。遺構図・遺物実測図・報告書作成ともにAdobe®Creative Suite®でデジタルトレース・編集等を実施し、印刷所にはPDF型式（X-1a;2001）で入稿した。

第2節 調査の経過

【10月】 19日：表土の重機掘削を行う。仮設トイレ・器材等を搬入。20日：調査区壁面の精査、遺構の検出作業を行い、溝・土坑・ピットを検出。土坑の掘削を開始。21日：溝の掘削を開始。22日：新たに井戸1基を検出する。24日：遺構測量を開始する。土坑SK12から古銭が出土する。31日：遺跡全景の空撮を実施する。

【11月】 1日：テフラ分析の試料採取。遺構掘削・測量を終え、器材を撤収する。2日：市教委による現地調査終了確認を受け、調査区の埋戻しを行う。

【12・1月】 報告書掲載遺物の写真撮影・実測、遺構全体図の編纂、遺構写真図版作成を行う。

【2・3月】 報告書掲載遺物の実測・トレース、遺構図版作成、報告書原稿執筆を行う。

【4・5月】 遺物図版作成、報告書編集を行う。報告書データを入稿し、校正を行う。

【6月】 報告書の印刷製本を行う。成果品の準備を行い、報告書とともに納品する。

第4章 基本層序

I層：駐車場碎石。

II層：As-A。調査区北部で溝状に検出。

（As-Aの処理坑の可能性）

III層：黒褐色土。As-B多量に含む。

IV層：黒褐色土。As-B多量に含む。

V層：黄褐色シルト層。洪水起源か。SX01・

02で検出。As-Bより上位である。

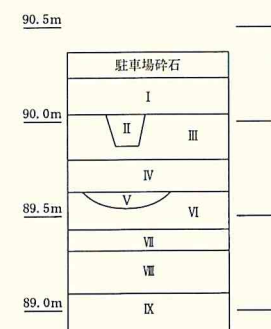
VI層：黒色土。As-C少量含む。

上面が遺構確認面である。

VII層：黒褐色土。As-C少量含む。

VIII層：高崎泥流漸移層。

IX層：高崎泥流層。

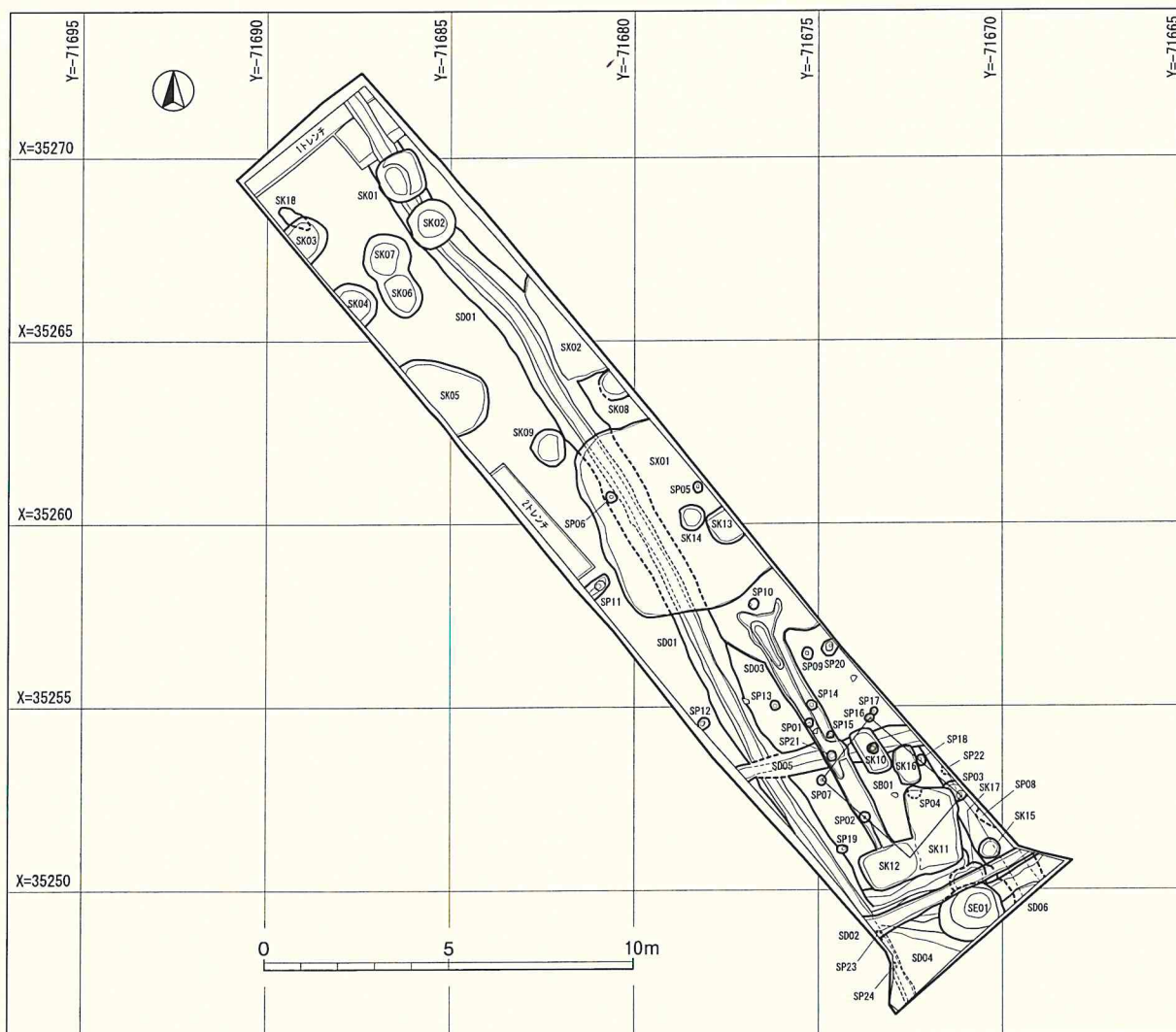


第4図 基本層序(1/40)

第5章 遺構と遺物

第1節 調査の概要

VI層上面で検出された遺構は、掘立柱建物跡1棟、溝6条、井戸1基、土坑18基、ピット19基、窪地2箇所である。縄文土器や石器、弥生土器がわずかに確認できるが、遺構は全て古墳時代以降である。時期を大きく分けるのはAs-Bの有無で、As-Bを覆土に含まない溝SD01・06が古墳時代、溝SD04が奈良平安時代である。SD01・06では黄褐色シルト質土が検出されており、隣接する上中居前屋敷遺跡の古墳時代の溝を埋めるHr-FA起源の洪水層に比定される。SD04は奈良平安時代の溝で、東西方位を意識した方向性や規模が、他の溝とは大きく異なるものである。第6章で触れるように、条里制との関連が考えられる。As-B降下以後の遺構は、ほとんどが中世に属する。掘立柱建物跡や井戸、複数の土坑群、小規模な区画溝があり、重複も認められる。本遺跡周辺は本遺跡北東側を流れる矢中堰の影響が大きく、遺構の多くは矢中堰の方向性に沿っている。また瓦の出土などからは、上中居前屋敷遺跡で想定された中世寺院との関連が窺われる。

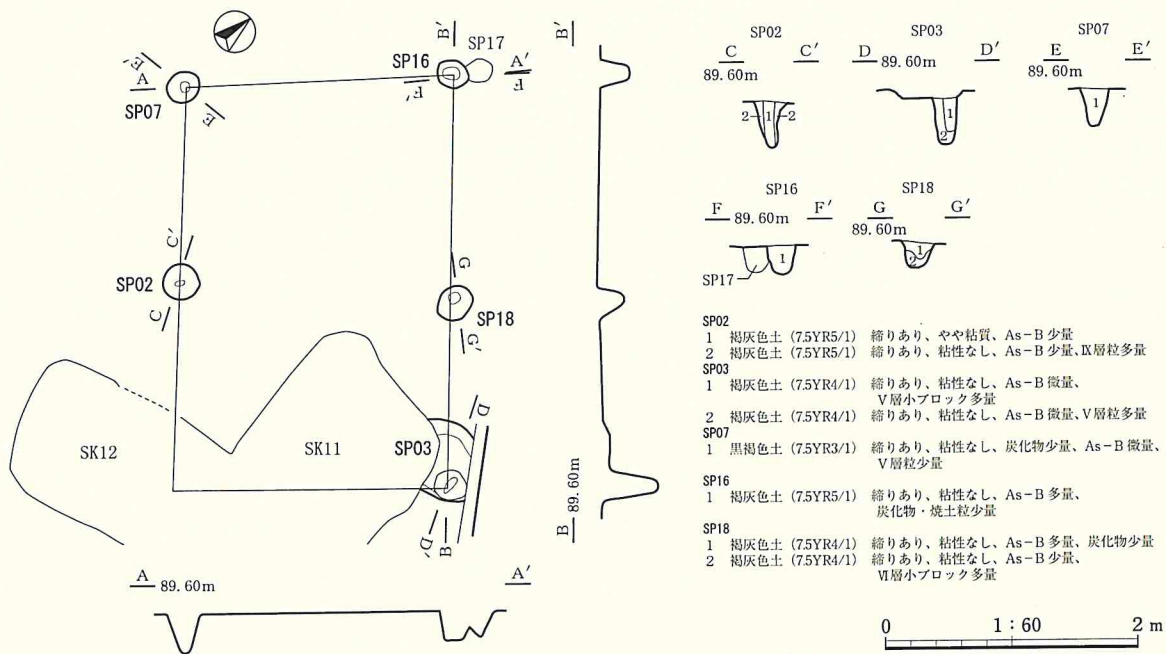


第5図 下中居天神裏遺跡3全体図 (1/200)

第2節 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡 SB01 (第6図)

調査区の南東部で検出した。重複する土坑SK12により南隅の柱穴を検出できなかったが、1間×2間の掘立柱建物跡と推測される (SP02・03・07・16・18)。溝SD03に切られ、溝SD06を切る。桁行3.27m、梁行2.12mで、平面積は6.93㎡である。主軸はN-49°-Wである。柱掘り方は径25~30cmの円形基調で、深さは23~43cmである。断面で確認された柱痕は径10cm前後である。遺物は出土していないが、柱穴の覆土にAs-Bを含むことから、時期は中世と考えられる。



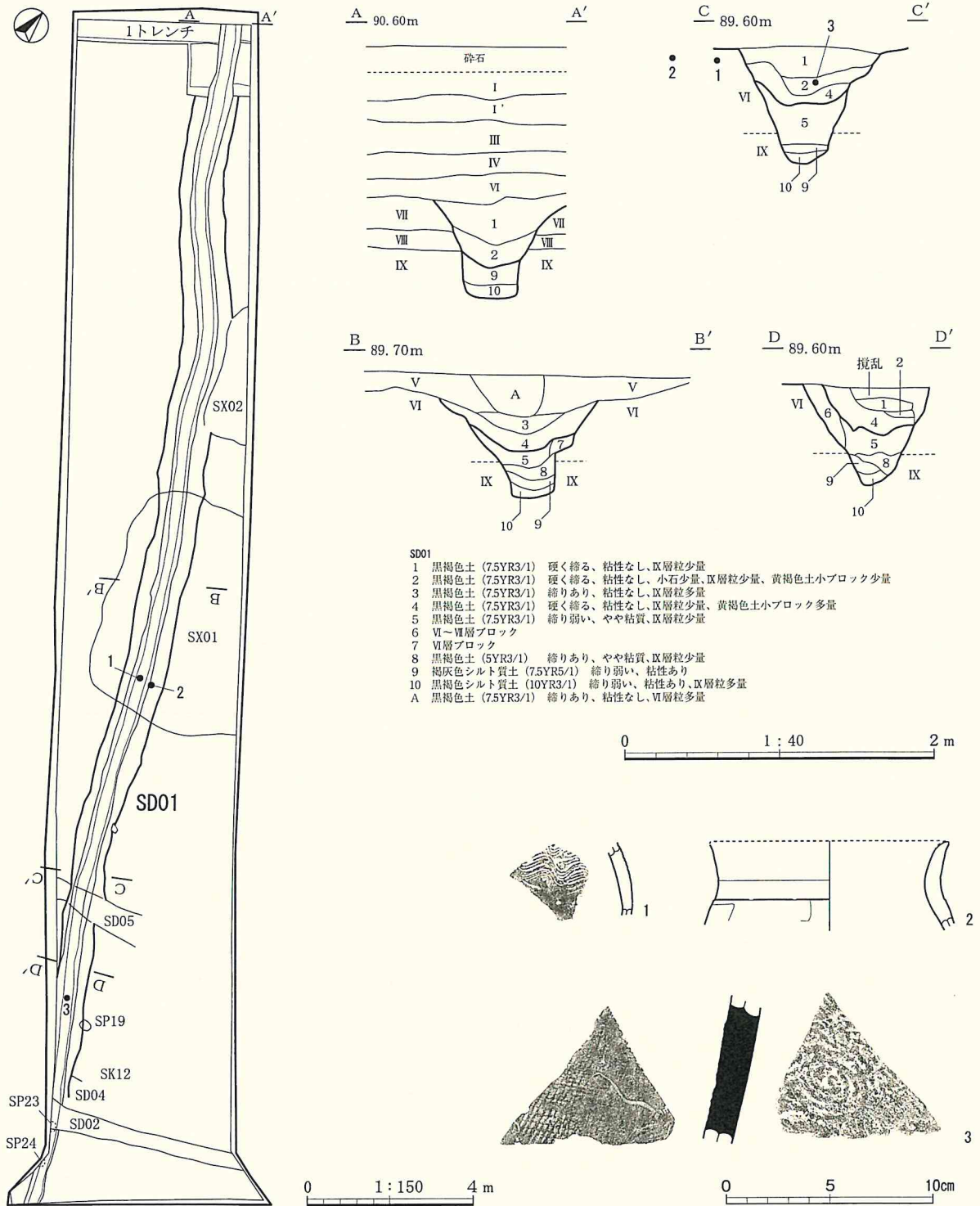
第6図 掘立柱建物跡 SB01 平面図・断面図

第3節 溝

溝 SD01 (第7図、P.L.2・3・5)

調査区内を蛇行しながら北西から南東へ流れる溝である。全長29.0m以上、上幅0.76~1.19m、下幅0.34~0.48m、深さ0.64~0.82mである。断面形状は箱葉研状で、底面は溝掘削時の工具痕と思われる細かい凹凸がみられる。底面の高低差は南東端が北西端より11.5cm低くなる。主軸方位はN-32°-Wを示す。調査区中央部から北側では、土坑SK01・02、窪地SX01・02、ピットSP06に切られる。南側では溝SD02・04・05に切られる。覆土は黄褐色土を多く含む上層(1~4層)と、黒褐色のシルト質土が主体となる下層(5~10層)に分けられる。覆土の上層部分で溝の立ち上がりが大きく開くことからすれば、上層は溝の掘り直し後に堆積したと考えられる。掘り直し後の溝は下幅30~50cm程度の断面逆台形を呈し、掘り直しは溝の全体にわたって認められる。遺物は、上層から樽式土器甕(1)、土師器鉢(2)、須恵器甕(3)、土師器片が各1点出土したのみで、下層からは出土しなかつ

た。覆土に As-B を含まず、古代の溝 SD04 に切られることや出土遺物から、古墳時代の溝である可能性が高く、覆土上層に含まれる黄褐色土が Hr-FA 起源の洪水層であるとすれば、6世紀初頭以前に開削された溝と考えられる。



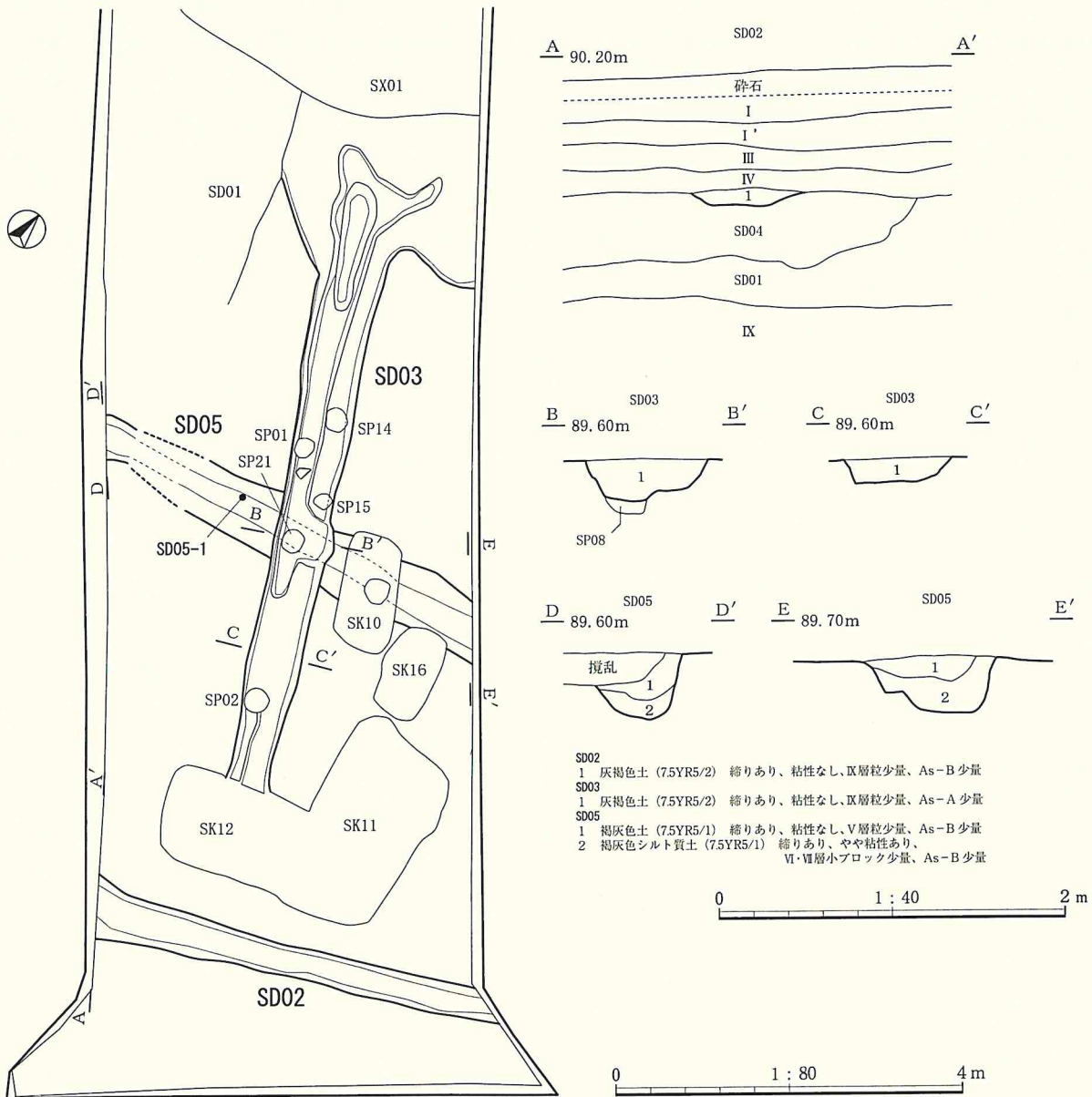
第7図 溝 SD01 平面図・断面図及び出土遺物

番号	器種	法量 (cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土位置等	
SD01 1	弥生土器 甕	口径 底径 器高	- - -	①良好 ②にぶい黄褐/橙 ③赤褐色粒、角閃石 ④胴部破片	外面：胴部上半櫛描波状文。胴部煤付着。 内面：内面横方向ミガキ。	中央部 覆土上層
SD01 2	土師器 鉢	口径 底径 器高	(11.6) - -	①良好、無黒斑 ②橙/橙 ③赤褐色粒、白色粒、角閃石 ④口縁部~胴部上位破片	外面：口縁部ヨコナデ、胴部上位横方向ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ、胴部上位ナデ。	中央部 覆土上層
SD01 3	須恵器 甕	口径 底径 器高	- - -	①良好 内面に自然釉 ②灰オリーブ/黄灰 ③白色粒、黒色粒 ④胴部破片	外面：胴部格子タタキ後にナデ。 内面：胴部当て具痕。	南東部 覆土上層

第2表 溝SD01出土遺物観察表

溝SD02 (第8図、P.L.3)

調査区の南東部で検出された溝である。上幅35~52cm、下幅18~34cm、深さ9~15cmの断面逆台形を呈し、N-64°-Eの方位に直線的に延びる。溝SD01・04・06、井戸SE01を切っている。遺物は出土しなかったが、覆土にAs-Bが含まれることから、中世の溝と考えられる。



第8図 溝SD02・03・05平面図・断面図

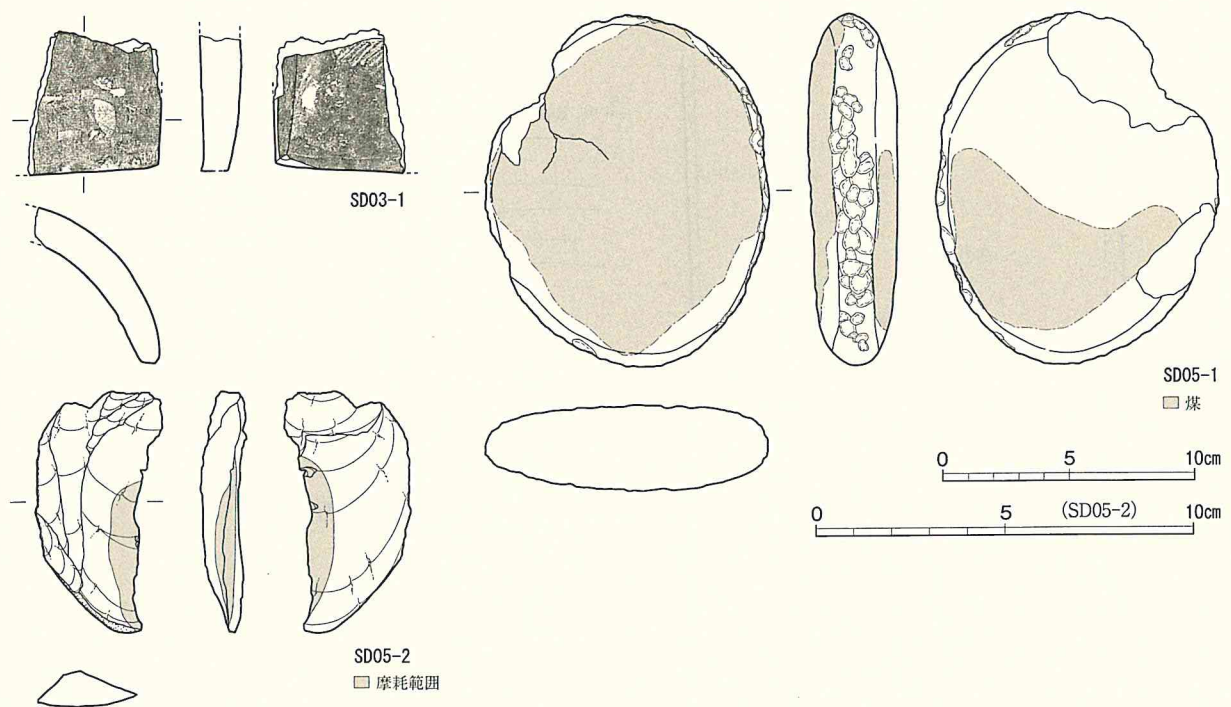
第5章 遺構と遺物

溝 SD03 (第8・9図、P.L.3・5)

調査区南東部で検出された溝である。上幅46～75cm、下幅35～61cm、深さ10cmの断面逆台形を呈し、部分的に幅20cm前後、深さ8cm程度に一段深くなる。N-29°-Wの方位に直線的に走向する。南東端は土坑SK12と重複して途絶し、北西端は北に向かって大きく広がりながら浅くなって不鮮明となる。溝SD05、ピットSP01・02・08・14・15を切っている。遺物は丸瓦(1)、土師器甕・焼締陶器甕の破片、棒状礫が出土した。覆土にAs-Aが含まれることから、近世の溝である可能性が高い。

溝 SD05 (第8・9図、P.L.3・5)

調査区南東部で検出された溝である。上幅40～75cm、下幅24～34cm、深さ23～37cmの断面U字状を呈し、N-78°-Eの方位に直線的に走行する。溝SD01を切り、溝SD03、土坑SK10、ピットSP21に切られる。遺物は磨石(1)、スクレイパー(2)が出土した。覆土にAs-Bが含まれることから、中世の溝と考えられる。



第9図 溝SD03・05出土遺物

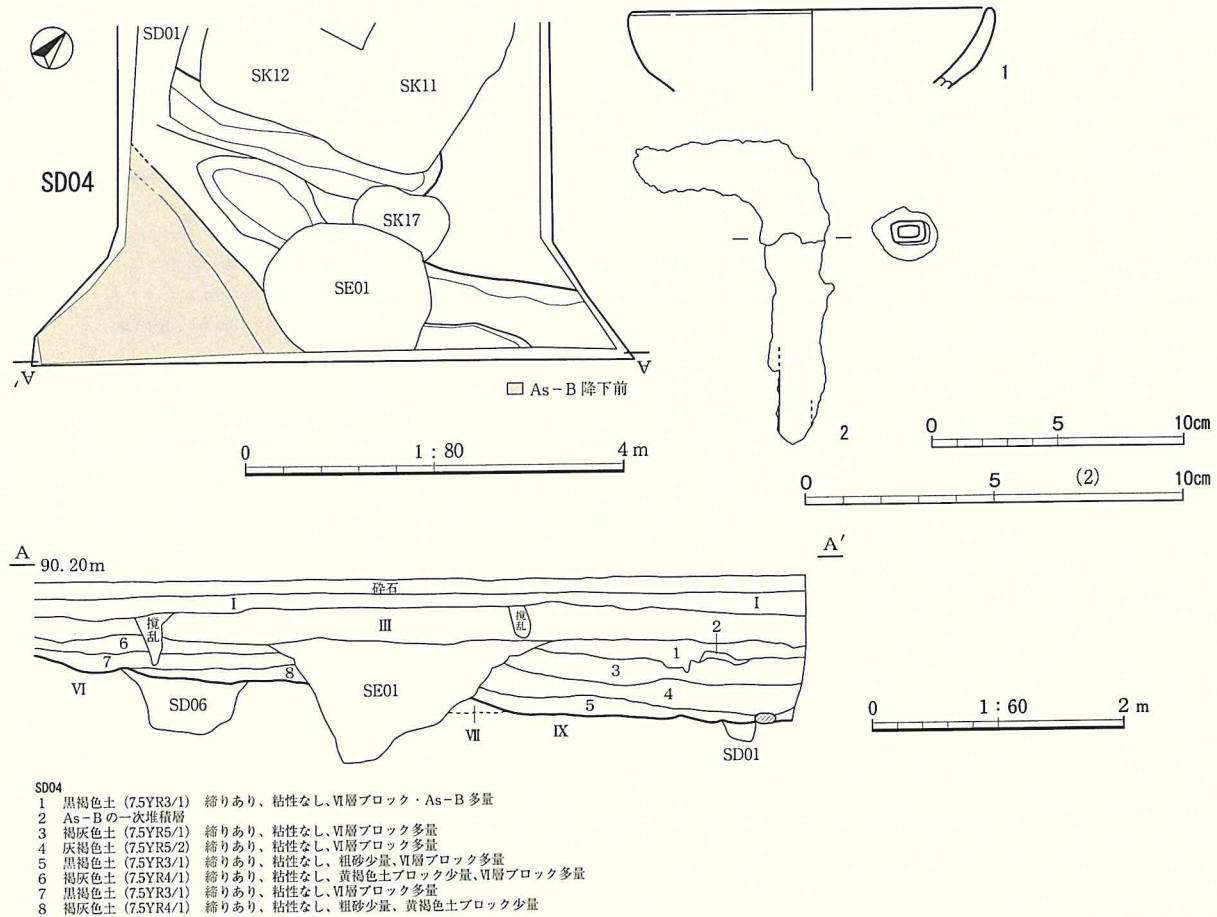
番号	器種	法量(cm)		①焼成 ②色調(内/外) ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土位置等
		長さ	幅			
SD03 1	丸瓦	—	—	①硬質 ②灰/灰 ③石英、白色粒、黒色粒 ④広端部破片	凸面：ナデ。 凹面：布目痕とナデ。側面面取り。	覆土一括
SD05 1	磨石	長さ 14.0 幅 11.3 厚さ 3.6	—	重さ687.10g。安山岩。 表・裏面に摩耗痕が認められ、右側面に顕著な敲打痕がある。全体に煤の付着が認められる。		中央部覆土
SD05 2	スクレイパー	長さ 6.5 幅 3.4 厚さ 1.2	—	重さ19.72g。頁岩。 礫皮をもつ縦長剥片の左側縁に微細剥離痕が認められ(潰し)、右側縁に摩耗痕とみられる光沢を帯びる範囲が認められる。		覆土一括

第3表 溝SD03・05出土遺物観察表

溝 SD04 (第10図、P.L.3・5)

調査区南東端で検出された東西溝である。南岸は調査区外になる。溝SD02、井戸SE01、土坑SK11・12に切られ、溝SD01・06を切る。2段階の変遷があり、古段階は上幅2.2m以上、下幅1.9m以上、深さ65cmの断面逆台形と想定され、N-84°-Wに直線的に延びる(第10図網掛け部)。新段階は上幅2.5m以上、下幅2.2m以上、

深さ 30cm を測り、やや不規則であるが概ね N-69°-E の方位に走向する。覆土は、下層に粗砂が含まれ、流水が窺われる。覆土最上部には As-B の一次堆積層が確認される。遺物はごく少ないが、土師器坏(1)、鉄製品(2)、棒状礫が出土した。古墳時代と推定される SD01 を切ることや、As-B の存在や出土遺物から、古代の溝と考えられる。とくに古段階の東西方向に沿った状況は、後述する条里制地割との関連が窺われるものである。



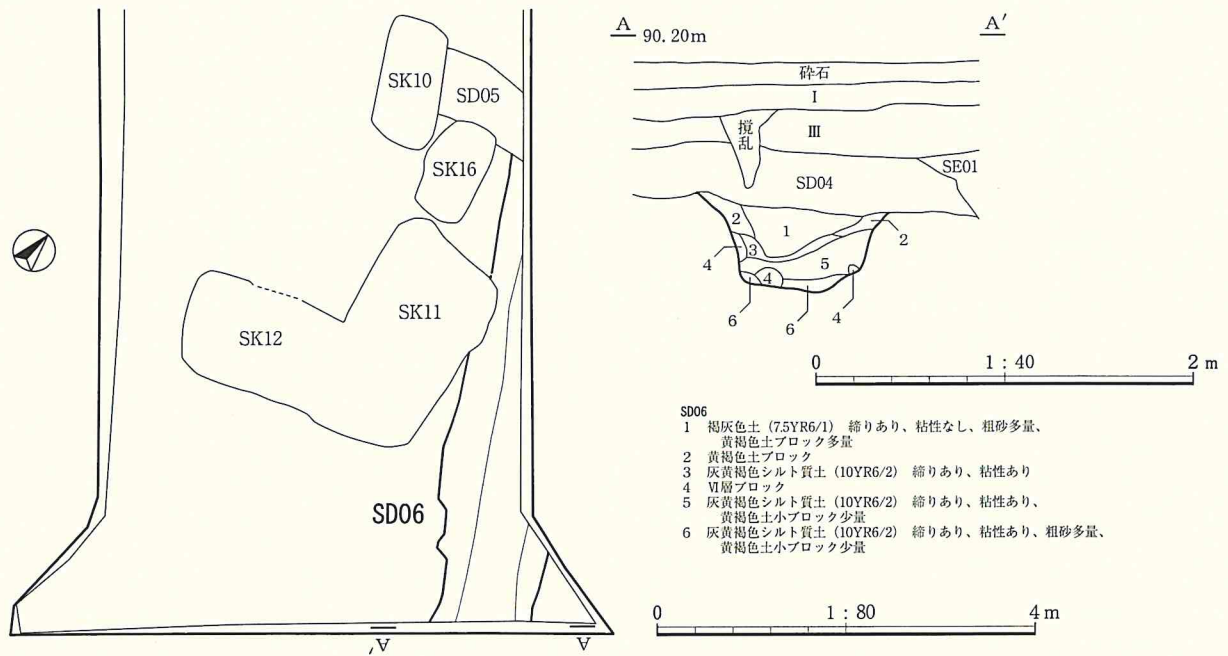
第 10 図 溝 SD04 平面図・断面図及び出土遺物

番号	器種	法量 (cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土位置等	
SD04 1	土師器 坏	口径 底径 器高	(14.3) - -	①良好 ②橙/橙 ③雲母、チャート、赤褐色粒 ④口縁部~体部破片	外面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ。	覆土一括
SD04 2	鉄製品 釘カ	長さ 幅 厚さ	8.1 0.9 0.6	重さ 29.11g。L 字状に曲り、断面長方形。		覆土一括

第 4 表 溝 SD04 出土遺物観察表

溝 SD06 (第 11 図、P L. 3)

調査区の南東部で検出された溝である。上幅 1.0 m、下幅 0.6 m、深さ 50cm の断面逆台形を呈し、N-29°-W の方位に直線的に延びる。溝 SD02・04・05、土坑 SK11・15、ピット SP03 に切られる。覆土は 1 層がピット状の別遺構の可能性はあるほかは、黄褐色土を多量に含むシルト質土である。覆土中の黄褐色土は、溝 SD01 の上層にも含まれていたもので、埋没状況としては本溝が SD01 よりも新しい可能性を示している。遺物は全く出土していないが、古代の溝 SD04 に切られることから、古墳時代の溝である可能性がある。溝 SD01 と同様に、黄褐色土が Hr-FA 起源の洪水層であるとすれば、6 世紀初頭以前に開削された溝と考えられる。

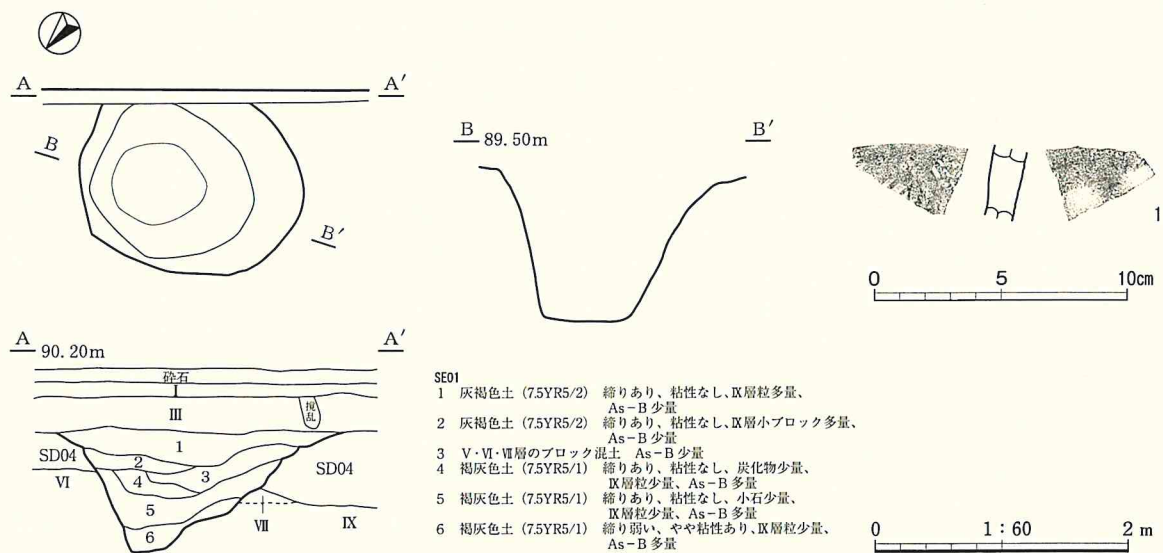


第11図 溝SD06平面図・断面図

第4節 井戸

井戸 SE01 (第12図、P.L.4・5)

調査区南端に位置する。上端径約1.7m、下端径0.65mの不整形円で南東端が調査区外になる。深さは1.2mで、断面逆台形である。溝SD04を切り、溝SD02に切られる。底面はIX層を掘り抜き、湧水が顕著である。覆土下層はAs-Bを多量に含む褐灰色土、上層は地山ブロックを含む人為的な埋土である。遺物は焼締陶器甕(1)、土師器甕、種実(桃核など)が少量出土した。出土遺物や、覆土にAs-Bが含まれることから、中世の井戸と考えられる。



第12図 井戸SE01平面図・断面図及び出土遺物

番号	器種	法量 (cm)		①焼成 ②色調 (内/外) ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土位置等
		口径	底径			
SE01 1	焼締陶器 甕	口径	-	①良好 ②にぶい黄橙 / にぶい褐 ③白色粒、黒色粒 ④胴部破片	外面：胴部格子状の押印カ。 内面：胴部ナデ。	覆土一括 常滑焼カ
		底径	-			
		器高	-			

第5表 井戸 SE01出土遺物観察表

第5節 土坑・ピット

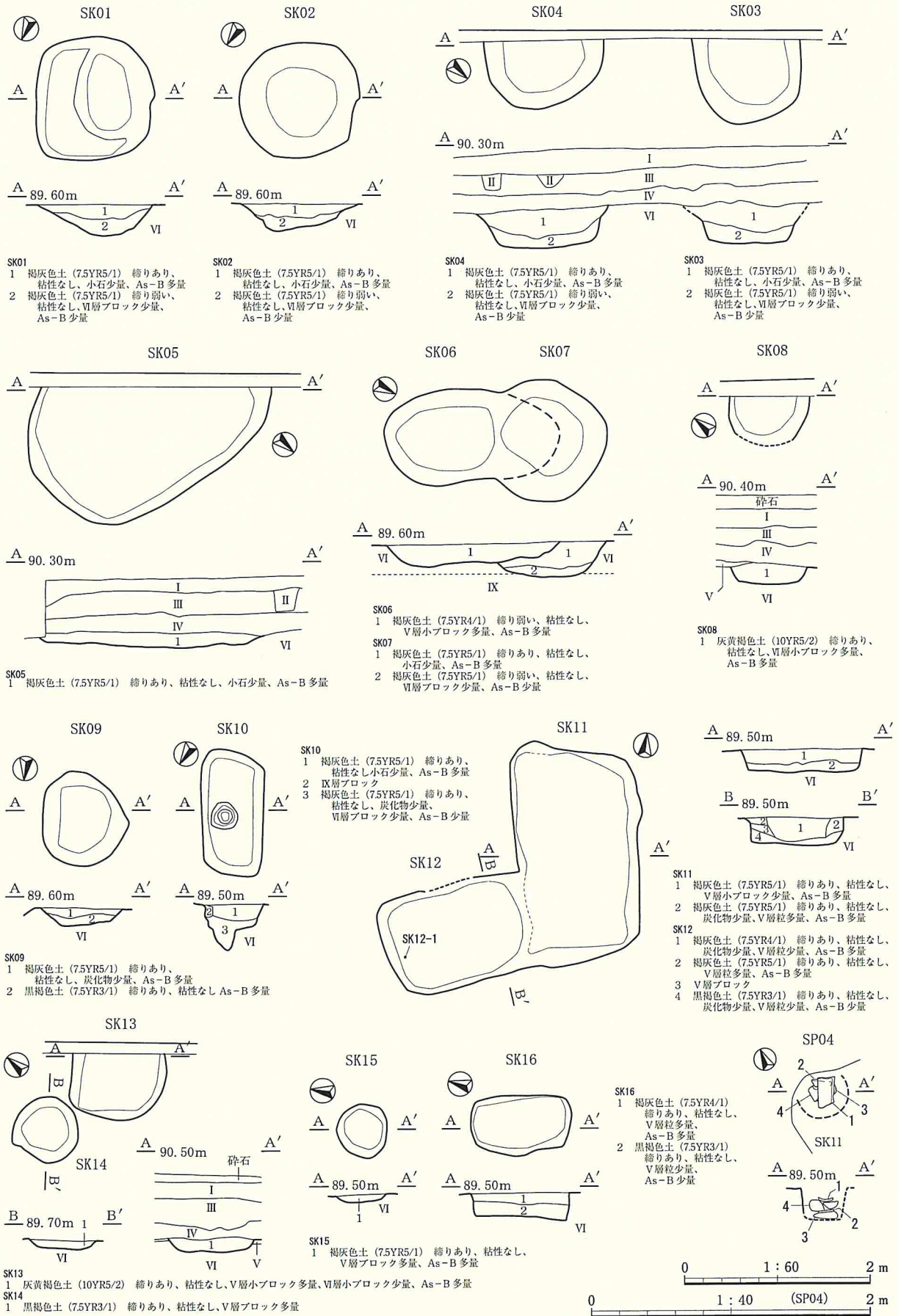
土坑は18基検出した(第13図、第6表、P.L.4・5)。このうちSK17・18は樹木痕ないし倒木痕と考えられ、As-B降下より以前のものである。SK01～07は平面形が隅丸方形に近い円形で共通する土坑で、調査区北西部に土坑群を形成する。いずれも層位的にAs-Aより古く、覆土にAs-Bを含むことから中近世の土坑と位置付けられる。遺物は古代の土師器・須恵器がごく少量混入するだけである。一方で、調査区南東部には隅丸長方形の大小の土坑がまとまる(SK10・11・12・16)。SK10・16は長軸1.08～1.32m、短軸0.64～0.67mの規模で、SK11・12は長軸1.56～2.32m、短軸1.13～1.40mと規模が大きくなる。土坑の形状や方位、古銭の出土(SK12)から、中世の土坑墓と考えられる。SK13も同様の可能性がある。いずれも覆土にAs-Bを含む。このほかの土坑は隅丸方形ないし円形の浅い土坑で、性格は明らかでないものの、覆土にAs-Bを含むことから、中世の土坑と判断される。

ピットは24基検出した(第13図、第6表、巻頭図版2、P.L.4・6)。このうちSP02・03・07・16・18は掘立柱建物跡SB01の柱穴である。その他のピットも調査区南東部、SB01周辺に多いことから、同所付近には別の掘立柱建物跡が存在した可能性も考えられる。SP04は、SK11の北西隅に重複する中世のピットであるが、底面から上に扁平礫(3)・丸瓦(2)・被熱礫(4)・軒丸瓦(1)の順に積み重なって検出された。礫はいずれもコゲや焼土が付着しており、何らかの道具として使用されたものと考えられる。隣接する上中居前屋敷遺跡で想定された中世寺院との関連が注意される遺物である。

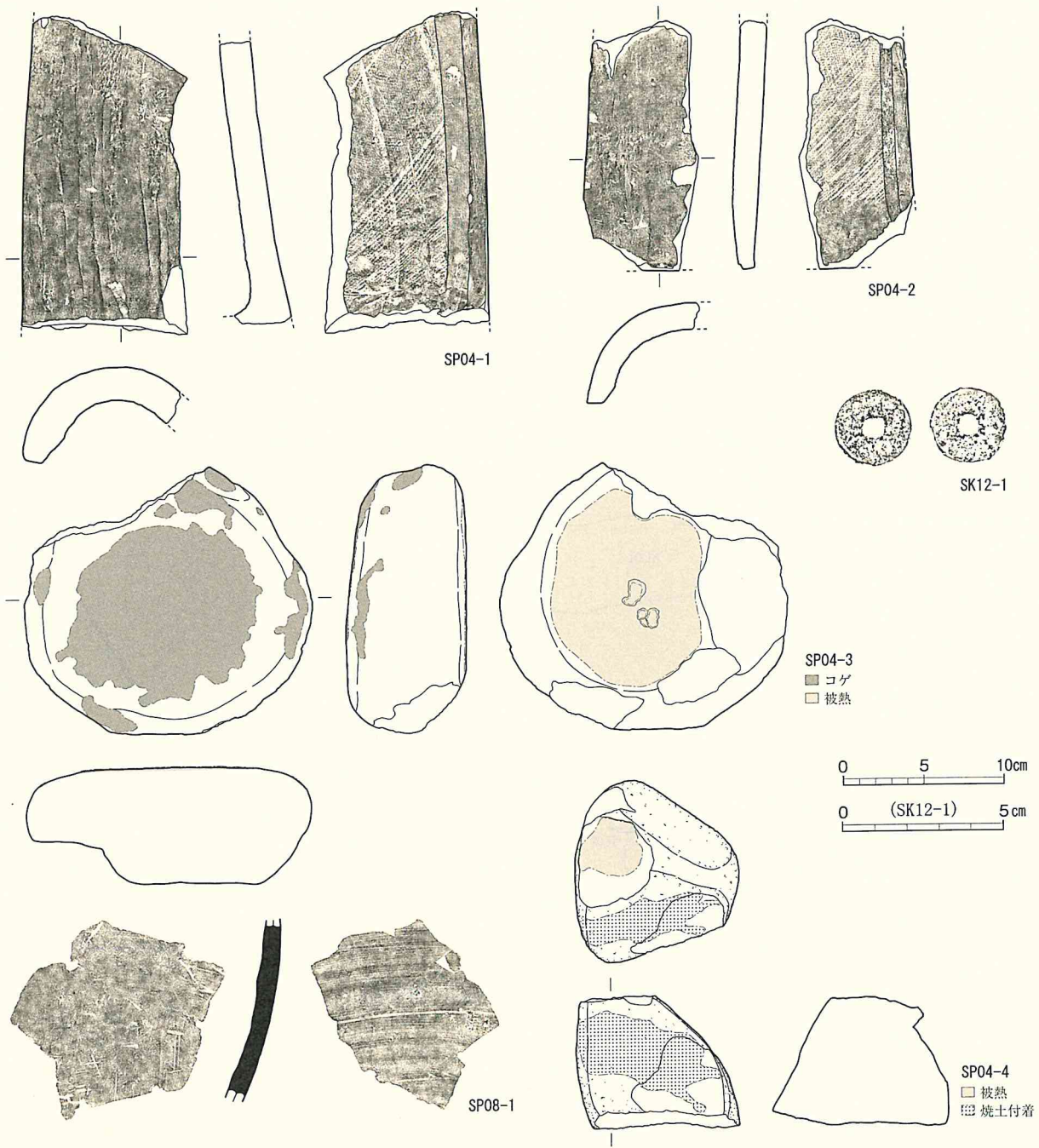
番号	形状	長径/短径/深さ (cm)	その他(覆土・出土遺物等)	番号	形状	長径/短径/深さ (cm)	その他(覆土・出土遺物等)
SK01	隅丸方形	133/125/34	As-B含む。	SP05	不整円形	30/23/24	SX01を切る。As-B含む。
SK02	不整円形	125/124/28	As-B含む。	SP06	不整円形	30/28/21	SD01を切り、SX01に切られる。As-B含む。
SK03	隅丸方形	116/93+ α /28	As-B含む。	SP07	円形	26/24/30	SB01柱穴。As-B含む。
SK04	不整円形	129/72+ α /42	As-B含む。	SP08	隅丸方形カ	62/-/25	SD06を切る。As-B含む。須恵器片1点。
SK05	隅丸長方形	245+ α /185+ α /16	As-B含む。	SP09	隅丸方形	32/27/14	As-B含む。
SK06	隅丸長方形	143/103/24	土師器片1点。As-B含む。As-B含む。	SP10	円形	28/25/16	SD03に切られる。As-B含む。
SK07	隅丸方形	(129)/128/38	須恵器片1点。As-B含む。As-B含む。	SP11	楕円形カ	68+ α /44/30	As-B含む。
SK08	不整円形	85/64+ α /24	As-B含む。	SP12	円形	32/31/21	As-B含む。
SK09	不整円形	100/93/20	As-B含む。	SP13	円形	26/24/22	As-B含む。
SK10	隅丸長方形	132/67/50	As-B含む。	SP14	円形	27/25/25	SD03に切られる。As-B含む。
SK11	隅丸長方形	232/140/25	土師器片1点。As-B含む。	SP15	不整円形	22/18/22	SD03に切られる。As-B含む。
SK12	隅丸長方形	(156)/113/27	古銭1点・縄文土器片1点。As-B含む。	SP16	円形	25/21/24	SB01柱穴。SP17を切る。As-B含む。
SK13	隅丸長方形カ	103/79+ α /16	As-B含む。	SP17	不整円形	22/18/20	SP16に切られる。As-B含む。
SK14	隅丸方形	69/65/10	As-B含む。	SP18	円形	29/23/22	SB01柱穴。As-B含む。
SK15	不整円形	56/53/8	As-B含む。	SP19	不整円形	26/22/12	As-B含まない。
SK16	隅丸長方形	108/64/31	As-B含む。	SP20	不整円形	45/42/34	As-B含む。
SP01	不整円形	24/20/33	SD03に切られる。As-B含む。	SP21	不整円形	27/24/30	SD03に切られる。As-B含む。
SP02	円形	29/27/37	SB01柱穴。SD03に切られる。As-B含む。	SP22	円形カ	27/-/22	SD06を切る。As-B含む。
SP03	不整円形	25/24/43	SB01柱穴。SD06を切る。As-B含む。	SP23	円形カ	22/-/20	SD04を切る。SD02より古い。As-B含む。
SP04	(円形)	(36)/(36)/(44)	軒丸瓦1点・丸瓦1点。SK11を切る。As-B含む。	SP24	円形カ	21/-/-	SD04を切る。As-Bを含む。

第6表 土坑・ピット一覧表

第5章 遺構と遺物



第13図 土坑及びピット平面図・断面図



第 14 図 土坑及びピット出土遺物

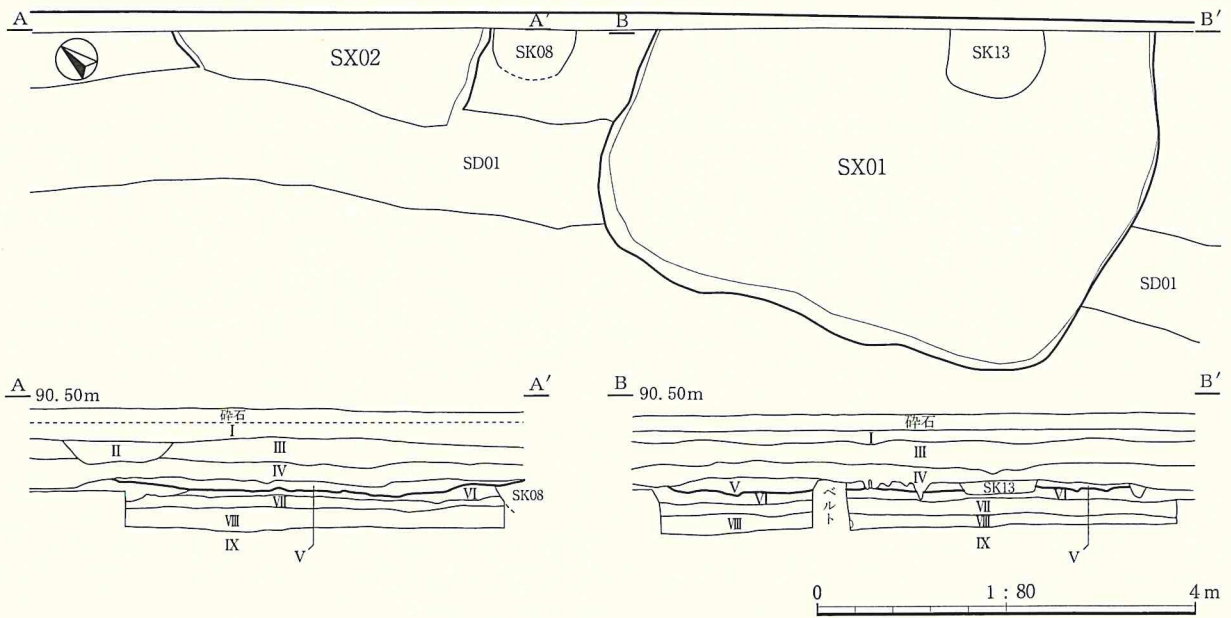
番号	器種	法量 (cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土位置等
SK12 1	銅銭	直径2.4cm、孔径0.6cm、厚さ0.2cm、重さ3.10g。名称は錯の付着で不明。			西側底面上
SP04 1	軒丸瓦	長さ - 幅 2.0 厚さ -	①軟質 ②にぶい黄褐色 / にぶい黄褐色 ③石英、白色粒、赤褐色粒 ④瓦当剥落	凸面：縄タタキ後にナデ。 凹面：布目痕とナデ。側面面取り。	No.4の上
SP04 2	丸瓦	長さ - 幅 - 厚さ 1.7	①硬質 ②灰 / 灰 ③白色粒、黒色粒、砂礫 ④広端部 1/2	凸面：縄タタキ後にナデ。 凹面：布目痕とナデ。側面面取り。	No.3の上
SP04 3	扁平礫	長さ16.7cm、幅17.9cm、厚さ7.5cm、重さ3.196g。安山岩。台石ないし礎石カ。 表面全体に焦げがあり、特に中央部には厚さ1.0mmの焦げた付着物がある。裏面は平滑で中央に被熱痕が認められる。			ピット底面上
SP04 4	被熱礫	長さ11.3cm、幅10.2cm、厚さ8.2cm、重さ1.117g。安山岩。磨石類を転用した支脚カ。 下端部は平坦な割れ面をもち、上端部に被熱範囲が認められる。周縁の一部に焼土付着。			No.2の上
SP08 1	須恵器 壺	口径 - 底径 - 器高 -	①良好 ②灰黄 / 灰黄 ③白色粒、黒色粒 ④胴部破片	外面：胴部ロクロナデ、一部ヘラナデ。 内面：胴部ロクロナデ。	覆土一括

第 7 表 土坑及びピット出土遺物観察表

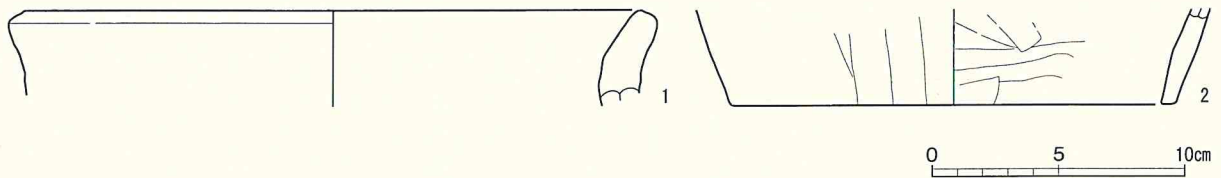
第6節 その他

調査区中央部で検出されたSX01・02は、VI層中の窪みにV層が堆積したものである（第15図、P L.4）。いずれも方形に近いプランで検出され、SX01で一辺5.5mの規模がある。窪みは断面レンズ状で、中央部での深さは10cmほどである。底面は細かな凹凸があり、V層がその凹部に入り込んだ状態であった。SX01とSX02の間のVI層は畔状に高まっていた可能性がある。溝SD01より新しい。As-Bを含む土坑SK08より新しいことから、中世段階の窪地として解釈しておきたい。

遺構外の出土遺物には中世の軟質陶器鍋（1）・焼締陶器甕、古墳時代の土師器甕（2）などが少量出土した（第16図、P L.6）。



第15図 SX01・02 平面図・断面図



第16図 遺構外出土遺物

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土位置等
1	軟質陶器鍋	口径 (25.6) 底径 - 器高 -	①軟質 ②灰オリーブ/灰オリーブ ③雲母、黒色粒 ④口縁部破片	外面：口縁部ヨコナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。	2号トレンチ IV層中
2	土師器甕	口径 - 底径 (17.6) 器高 -	①良好 ②にぶい黄褐/にぶい黄褐 ③雲母、片岩、赤褐色粒 ④胴部下端破片	外面：胴部下端縦方向ヘラケズリ。 内面：胴部下半ヘラナデ、下端横方向ヘラケズリ。	調査区一括

第8表 遺構外出土遺物観察表

第6章 調査成果

下中居天神裏遺跡の第3次調査で得られた成果と課題は以下の通りである。

古墳時代の溝 SD01・06 は、上中居前屋敷遺跡における古墳時代の溝にみられた Hr-FA 起源の洪水層に比定される覆土をもつことから、6世紀初頭以前に開削された溝である。この洪水層は、SD06 では覆土全体を占めるのに対し、SD01 では掘り直し後の覆土の一部に含まれることから、SD01 がより古い溝である。出土遺物の少なさに注意を要するが、上中居前屋敷遺跡で古墳時代前期の溝が多数あることから、掘り直し前の SD01 も前期に遡る可能性が高い。その埋没後に、平行する SD06 が掘削され、さらに SD06 も 6世紀初頭に洪水層で埋没すると、SD01 が再掘削されたと考えられる。このように同一方向の溝が複数掘削される状況は上中居前屋敷遺跡でも同様であり、下流側にあたる本遺跡 SD01・06 も同一の目的のもとに掘削された溝であるといえる。おそらくは遺跡南方に広がる低地の開発に供された溝群であろう。古墳時代の住居は未検出であるが、集落域は黒色土から古墳時代前期の土器を多数出土した上中居前屋敷遺跡 1次 1区 近辺（矢中堰北側）が候補地の一つである。

奈良・平安時代においては、溝 SD04 が注目される。古墳時代と大きく異なって東西方向を指向し、規模も大きい。覆土最上部に As-B の一次堆積層がある。わずかな出土遺物からは 8世紀代に遡る可能性もあるが、現状では時期を特定するには至らない。本遺跡の 200m 南方では As-B 下水田のある低地が広がっている（下中居天神裏遺跡 2次 8区）。この As-B 下水田については、下中居天神裏遺跡 1次 8区や下中居条里Ⅲ遺跡などで条里制に基づく地割が指摘され、地割に沿った大畦畔や水路が検出されている。この地割による飯玉神社付近の東西ラインを 109m 北上させると、本調査区の南端にあたり、SD04 の位置とほぼ重なってくる（第1図）。本遺跡周辺は、奈良・平安時代の住居が検出されていないことも勘案すると、水田経営に必要な水利機能を担うエリアであったと考えられる。下之城村前遺跡や下之城仲沖遺跡では、As-B 下水田を遡る条里地割の存在が示されており、SD04 もその一部となる可能性を秘めている。SD04 は、条里制施行や矢中堰の開削と絡みながら、その掘削の時期が大きな課題として残ることになる。

中世になると、矢中堰に沿って城館が多数出現する。それらは高崎城の前身である和田城に居城した和田氏の武士団が築造したもので、本遺跡南西の下中居新井屋敷は新井大学の居館と推定されている（第1図）。下中居天神裏遺跡 2次調査で確認された堀や井戸などの遺構群からは、16世紀頃の築造後、近世まで使用されたことが明らかとなっている。一方で、本遺跡北西の上中居前屋敷遺跡では、瓦を出土する溝・井戸、礎石を有する柱穴が検出され、下中居新井屋敷に先行する 14世紀後半から 15世紀頃の中世寺院の存在が推定されている（第1図）。本調査区は、土坑墓や瓦の存在から、この中世寺院との関わりが窺われる。土坑墓の可能性のある SK10～13・16 が存在する調査区南東部は、墓地として利用されたと考えられる。遺物が極めて少ないので推測の域を出ないが、土坑墓にみられる規模の大小は被葬者の何らかの違いを示すものであろうか。軸方位からは、SK11・16、SK10・12 が大小の組み合わせとなる。SP04 は土坑墓 SK11 を切るピットであるが、煤や焦げ（タール?）、焼土の付着した礫や丸瓦が出土している（巻頭図版 2）。礎石の可能性のある扁平礫や瓦は、上中居前屋敷遺跡の中世寺院に由来するものと考えられるが、このうち礫については、墓地としての立地から火葬施設に転用された遺物の可能性を考えておく必要がある。中世寺院の詳細はまだまだ明らかではないが、本調査区付近まで寺院域が広がっていた可能性を示す成果となった。その他、掘立柱建物跡 SB01 は土坑墓に切られる可能性が高く、南西側の柱筋の延長上に中心がある井戸 SE01 を伴うと考えられる。墓地となる前段階の何らかの施設であろうか。調査区北西部の円形基調の土坑は土坑墓群になる可能性もあるが、形状的には後出することから、下中居新井屋敷が築造された段階のものである。

第6章 調査成果

引用・参考文献

高崎市教育委員会 2012 『下中居天神裏遺跡 第1・2次調査』

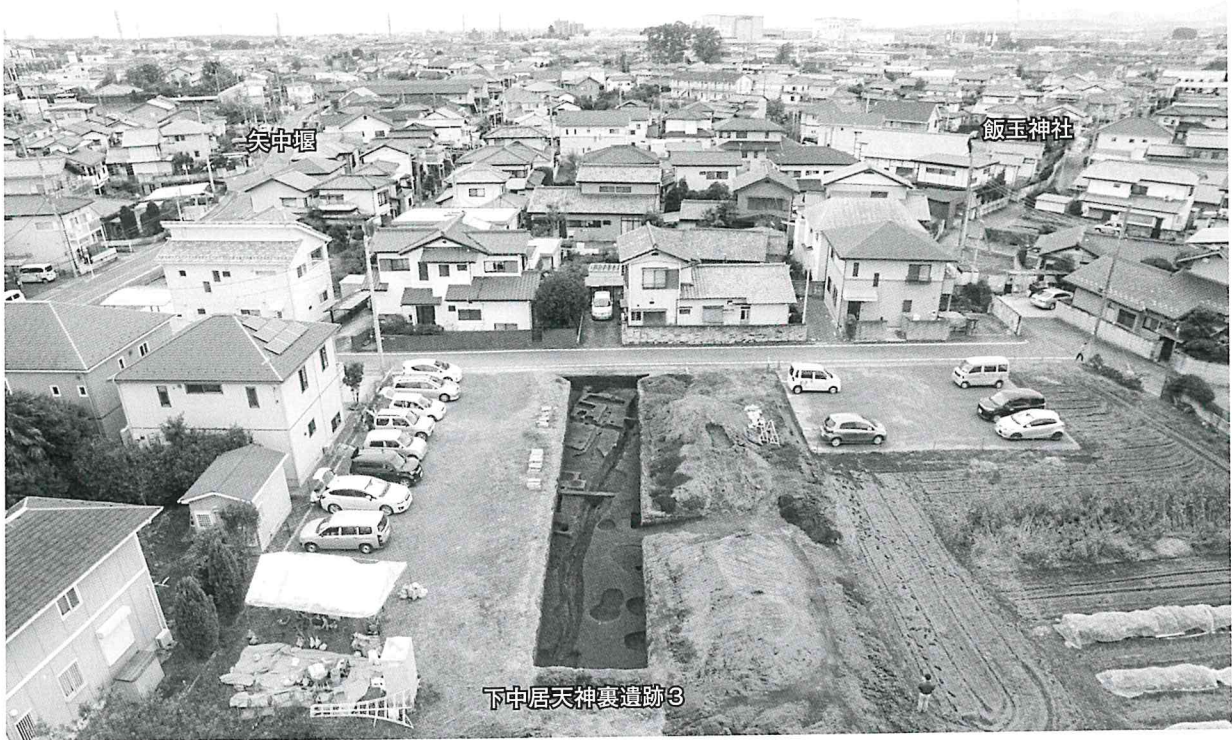
高崎市教育委員会 2014 『上中居前屋敷遺跡』

高崎市教育委員会 2015 『上中居前屋敷遺跡2』

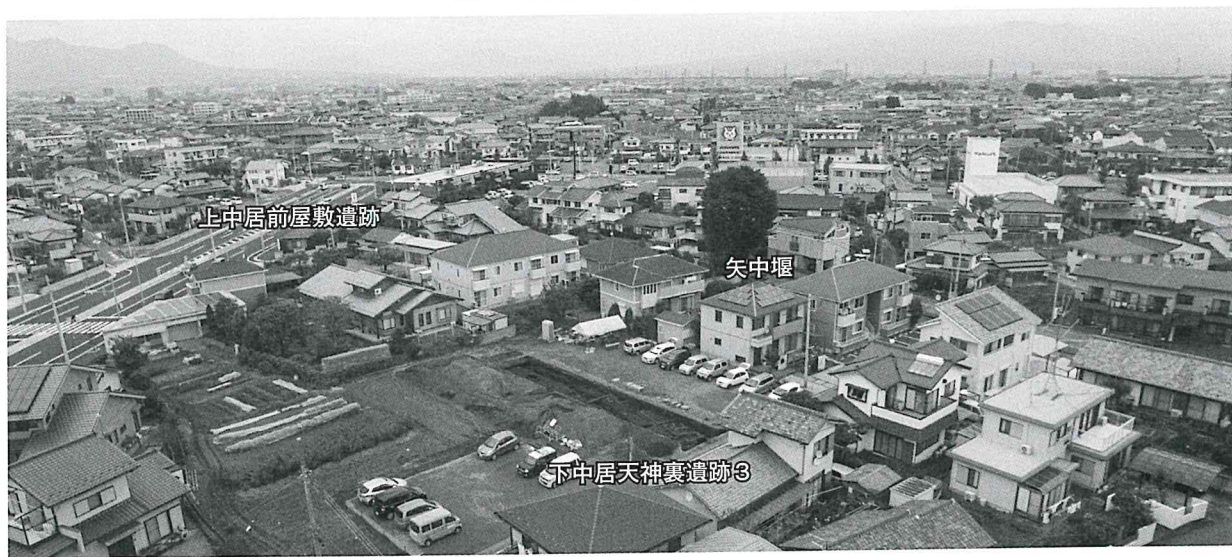
抄 録

フリガナ	シモナカイテンジンウライセキサン							
書名	下中居天神裏遺跡3							
副書名	建売分譲に伴う埋蔵文化財発掘調査							
巻次								
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第393集							
編著者名	矢島浩 常深尚							
編集機関	有限会社毛野考古学研究所							
編集機関所在地	〒379-2146 群馬県前橋市公田町1002番地1							
発行機関	有限会社毛野考古学研究所							
発行年月日	西暦2017年6月30日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / "	東経 ° / "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
下中居天神裏遺跡	群馬県高崎市 下中居町	102020	687	36° 18' 55"	139° 2' 7"	20161019 } 20161102	130 m ²	建売分譲
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
下中居天神裏遺跡	集落跡	古墳時代 奈良平安時代 中世 その他	溝 2条 溝 1条 掘立柱建物跡 1棟 溝 2条 井戸 1基 土坑 15基 ピット 18基 窪地 2箇所 溝 1条	土師器、須恵器 土師器、須恵器、鉄製品 軟質陶器、焼締陶器、瓦、銅銭 縄文土器、弥生土器、石器			奈良平安時代の溝は、遺跡南方に広がる水田跡で想定された条里制地割の延長線上にあたる。中世の遺構は、上中居前屋敷遺跡で想定された中世寺院に関わると考えられる。	

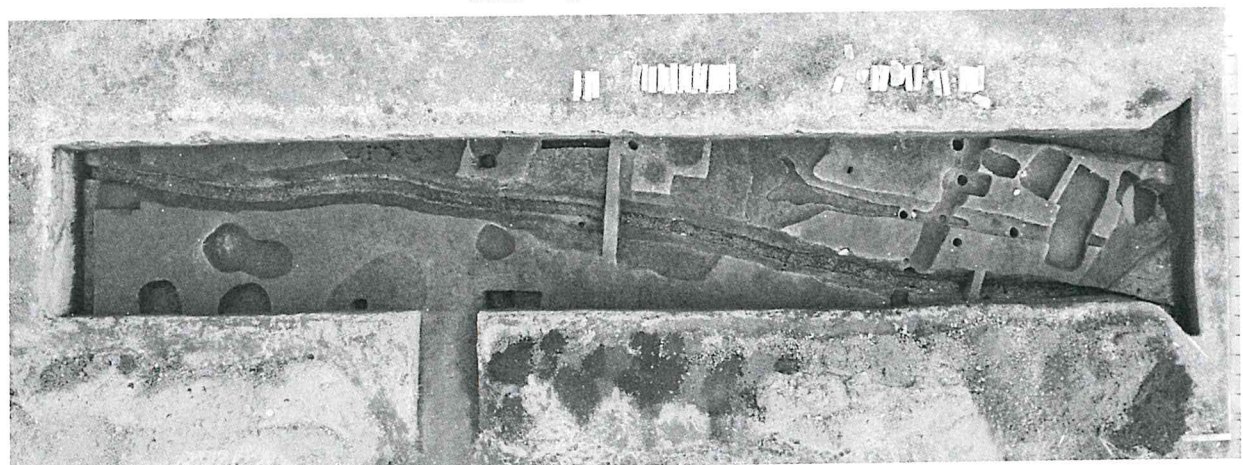
写真図版



調査区全景（空撮、北西から）



調査区全景（空撮、南から）



調査区全景（空撮、左上が北）



調査区全景（北西から）



溝 SD01 北部全景（南東から）



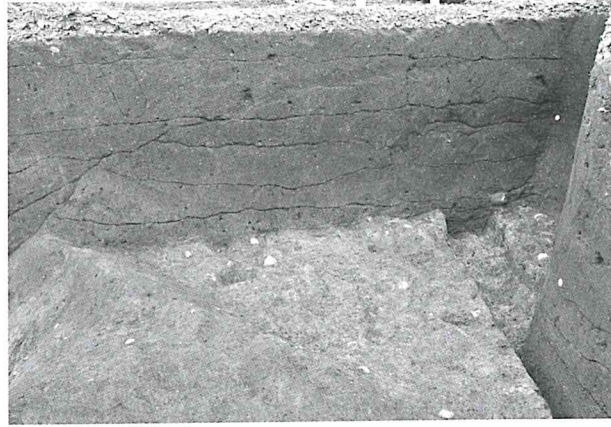
溝 SD01 北端土層断面 (南東から)



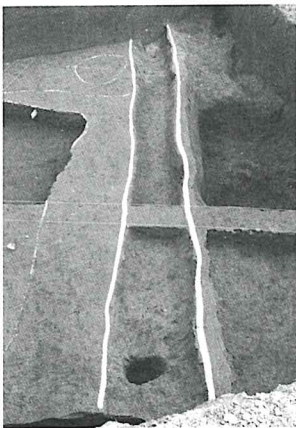
溝 SD01 中央部土層断面 (北西から)



溝 SD03 全景 (西から)



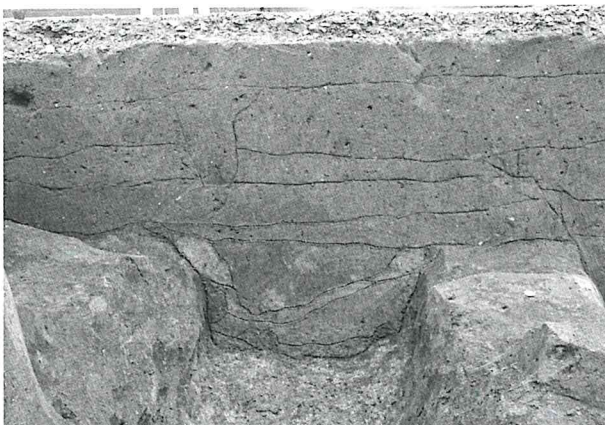
溝 SD04 全景及び土層断面 (北西から)



溝 SD02 全景 (南西から)



溝 SD05 全景 (東から)



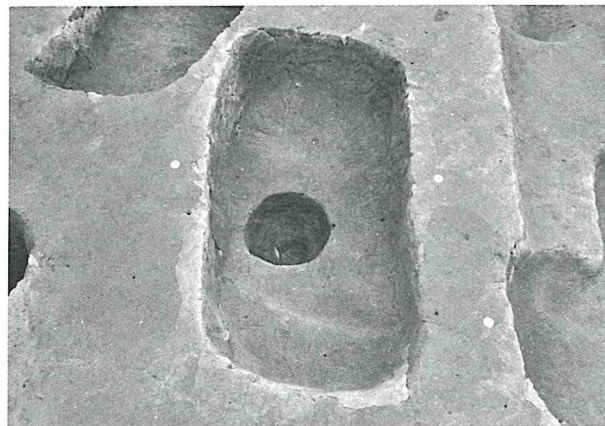
溝 SD06 南東端土層断面 (北西から)



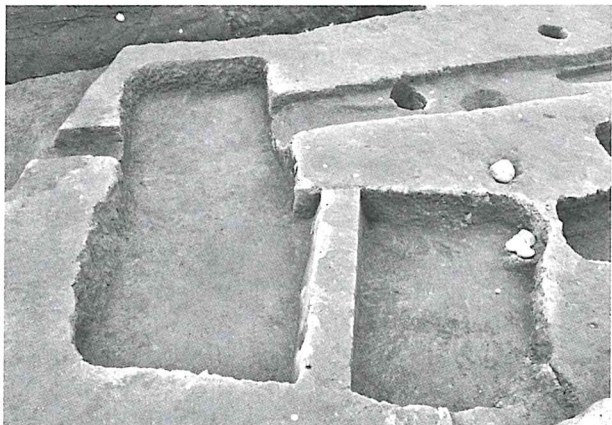
溝 SD06 全景 (南東から)



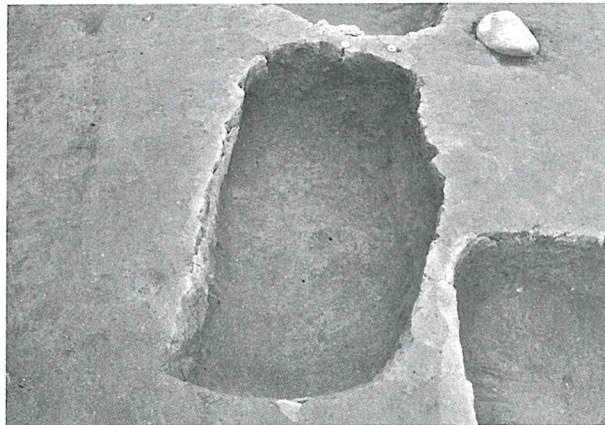
井戸 SE01 全景 (北から)



土坑 SK10 全景 (北西から)



土坑 SK11・12 全景 (東から)



土坑 SK16 全景 (北西から)



ピット SP04 上層遺物出土状況 (南東から)



ピット SP04 下層遺物出土状況 (南東から)



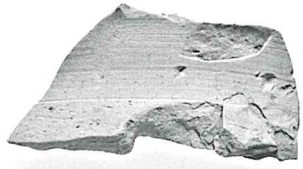
SX01 全景及び土層断面 (北西から)



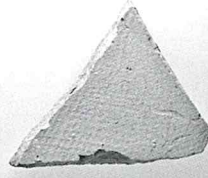
SX02 全景及び土層断面 (北西から)



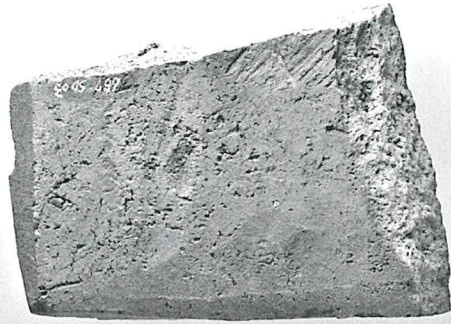
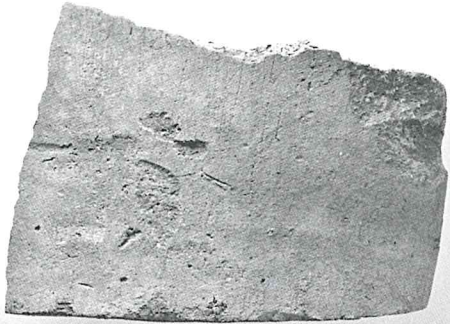
SD01-1



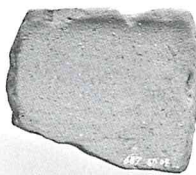
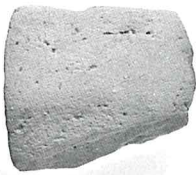
SD01-2



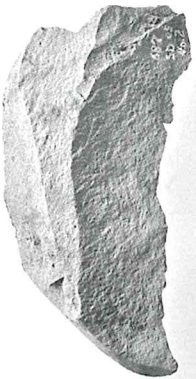
SD01-3



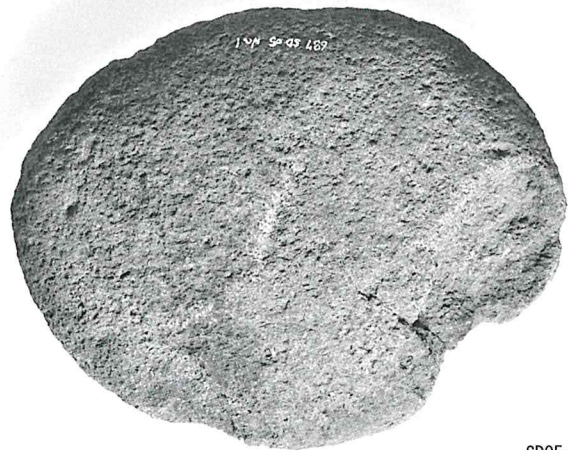
SD03-1



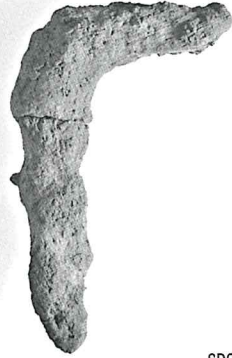
SD04-1



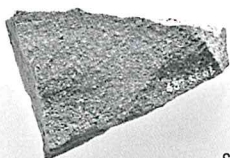
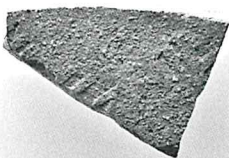
SD05-2



SD05-1



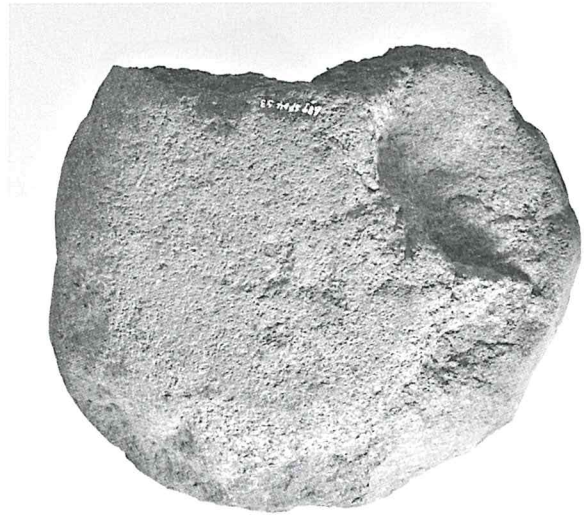
SD04-2



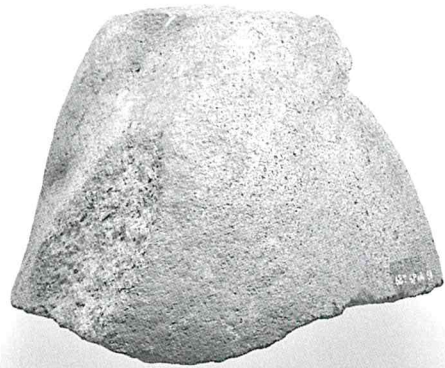
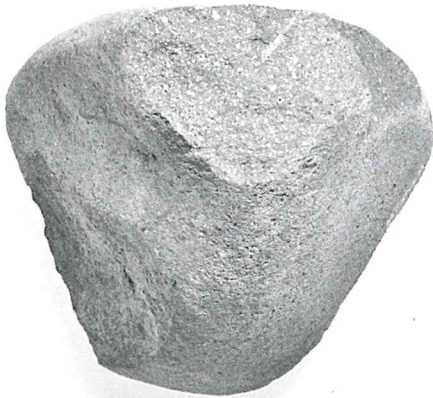
SE01-1



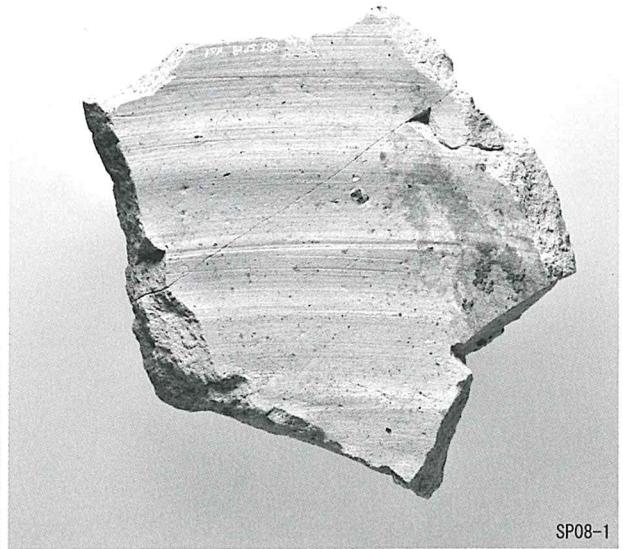
SK12-1



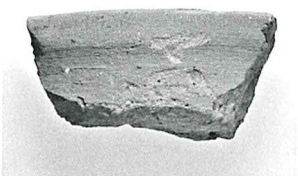
SP04-3



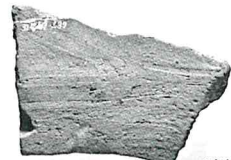
SP04-4



SP08-1



遺構外-1



遺構外-2

高崎市文化財調査報告書第393集

下中居天神裏遺跡 3

2017年6月29日印刷

2017年6月30日発行

編 集／有限会社毛野考古学研究所

〒 379-2146 群馬県前橋市公田町 1002 番地 1 電話 027(265)1804

発 行／有限会社毛野考古学研究所

印 刷／中村印刷工業株式会社

〒 930-0039 富山県富山市東町 2 丁目 3-22 電話 076-424-4616
